

IV 評価・分析

1 ルーブリック

年度当初の5月と年度末の2月に、全校生徒を対象にルーブリックによる自己評価を行った。年度当初は、ほとんどの生徒がすべての項目において、C評価・B評価という評価であった。しかし、一年間の活動を通して大幅な成長が見られるようになった。各項目においてC評価が大幅に減少し、A評価が増加している。また、実践力・調整力・コミュニケーション力においては熟達レベルであるS評価をつけている生徒もおり、生徒の変容を感じることができた。外部人材との協働や探究活動を通して、生徒の力が伸長したことはもちろん、成功体験の積み重ねが、生徒の自己肯定感を高めたことも影響しているのではないかと考えられる。来年度も、生徒の力を育成することはもちろん、生徒一人一人が、やりがいや自己有用感を感じることのできる探究活動を行っていききたい。

令和元年度 三崎高等学校地域活性化プロジェクト ルーブリック		() R () 番 氏名 ()			
		レベルC	レベルB	レベルA	
学習成果	レベルC 初心者・初級者レベル <知識・理解>	レベルB 自立・学習者レベル <応用・分析>	レベルA	自己評価	
評価項目	計画力	自分のプロジェクトに必要な情報を収集し、自ら計画を立てることができる。	自分のプロジェクトについて、現状や実現性を客観的に分析し、修正することができる。	・プロジェクトの成功に向けてみんなと話し合っ、成功させることができたら。(A) ・分析や修正はできたが、アドバイスをする余裕まではなかったから。(B)	
地域活性化プロジェクトプランの計画	5月→2月	75%→34%	19%→49%	6%→17%	0%→0%
	判断力	サポートを受けながら、自分の地域の特徴を理解している。	自分の地域の現状や課題について必要な情報を収集し、適切に判断できる。	情報を収集・分析するとともに、現状を踏まえ、プロジェクト達成のための判断を適切に行うことができる。	・周りの様子を見ながら、自分で考えて目的の達成のために行動できたから。(A) ・今まで気付いていなかった地域の現状や課題を知ることができたから。(B)
地域活性化プロジェクトの実践	5月→2月	44%→27%	50%→49%	6%→24%	0%→0%
	実践力	サポートを受けながら、プロジェクト達成のために自分自身がすべきことを理解している。	プロジェクトの目的と自分の役割を理解して、知識や経験を応用して自発的に行動している。	プロジェクトの状況を観察・分析し、目的の達成のために臨機応変に行動することができる。	・急なトラブルにも臨機応変に対応して、グループをまとめることができたから。(S) ・自分の周辺で対応できることには積極的に行動できたから。(A)
調整力	5月→2月	38%→10%	62%→61%	0%→27%	0%→2%
	調整力	プロジェクトチームのメンバーには、様々な立場や意見があることを知っている。	多様な意見や立場の違いを理解し、周囲の人々や物事との関係を調整することができる。	多様な意見や立場の違いを認め、学び合うことで、意見をまとめるだけでなく、新たな考えを発見し深めることができる。	・様々な人と一緒に活動してイベントを成功させることができたから。(A) ・皆で話し合いをしながらより良い案を出し、互いに尊重し合うことができたから。(A)
コミュニケーション	5月→2月	75%→22%	25%→49%	0%→27%	0%→2%
	コミュニケーション力	プロジェクトの内容を理解し、相手に伝えることができる。	自分が伝えたいことを適切に伝えるための方法を学び、相手に伝えることができる。	相手や場に応じて、自分が伝えたいことを聞き手に効果的に伝えることができる。	・せんたんミーティングで知り合った他校の生徒に声をかけ、せんたん劇場に呼ぶことができたから。(S) ・今年、一番意識して行動し、一番伸びた力だと思う。(A)
5月→2月	50%→30%	31%→33%	19%→32%	0%→5%	

2 生徒振り返り

(1) アート班

- ・作品の制作や展示を通して、今まで気付いていなかった地域の魅力を知ることができた。1年間の活動を通して、自分の至らない点に気づき、改善することができるようになった。また、相手の意見を最大限尊重できるようになったり、自分たちの活動を客観視してより良くしていったりすることができるようになった。今年の活動では、計画が甘くて活動してから時間を無駄にすることがあったので、来年はしっかりした計画を立ててから活動するようにしたい。また、活動する場面で、することを把握できていない人がいたこともあったので、役割分担などもはっきりしたものにするようにしたい。
- ・せんたん劇場での布を使ったアート作品作りや、軽石でのモアイ像作りなどに積極的に取り組むことができた。布アート作品は、染色がうまくいくのか不安だったけれど、きれいに色が出て、着色するのが楽しかった。イベント当日は少し天気が悪かったけれど、私たちが作った作品がきれいに飾られているのを見たときはうれしかった。自分の得意分野である美術で活躍できて、改めてものを作る楽しさを感じることができた。また、他の班の人が手伝ってくれたり、地域の人にアドバイスしてもらったりして多くの人に様々な場面で助けてもらい、感謝の気持ちで一杯だ。

(2) 情報・防災班

- ・今までに、何度も避難訓練をしてきたけれど、妊婦や高齢者、車いすの人の立場で訓練したのは初めてだったので、新しい発見が多くあったし、自分にできることを考えることができた。様々な人の立場での避難訓練を通して、校内の危険箇所気付いたり、避難所運営ゲームを通して、災害発生時に自分たちができることについて考えたりすることができた。来年度は、校内だけではなく、範囲を広げて地域での防災のことについても研究していきたい。今年取り組んだ防災マップについても改良を加えて、多くの人の役に立つものを作りたい。
- ・せんたん劇場では、地域の子どもたちに防災に関することを考えてもらうきっかけにしたいと考え、防災紙芝居と防災かるたの作成を行った。今までにそのようなものを作ったことがなかったので、班のメンバーと話し合いをしながら準備をした。自分の役割だけではなく、周りの人のサポートをしながら進めることができた。しかし、準備に時間がかかり完成がぎりぎりになってしまったり、リハーサルの時間が足りなくなってしまうので、来年度は改善したい。一年の活動を通して出会った人たちとの交流で自分が変わったと感じた。

(3) イベント班

- ・「みさこうたいそう 115」を行った、どのイベントでも、地域の人たちが元気に参加してくださったのでうれしかった。いろいろな場所に行って、イベントを通して地域を盛り上げることができたと感じた。今までは、人前が出るのが苦手でイベントや集団で活動することから逃げていたけれど、イベント班として活動するようになってからは、苦手ではなくなってきた。コミュニケーション能力がついたと感じられるようになったし、楽しく過ごせるようになった。まだ、声が小さかったり、動きが小さかったりするときもあったので、声も動きももっと大きくしていきたい。今年は、町内のイベントにしか参加していないので、町外のイベントにも参加して「みさこうたいそう 115」を広めていきたい。
- ・イベント班として、イベントに6回以上参加するという目標を立てたけれど、班としても個人としてもその目標を達成することができて良かった。最初は緊張して表情が暗いときもあったけれど、今は明るくできるようになったので今後も続けたい。私はイベント班に入ってよかったと思っている。今までの自分は、大勢の人の前に立つのが嫌いだったけれど、イベント班に入ってたくさんのイベントに参加することで、活動するのが楽しくなってきたし、積極的に行動できるようになったと感じているからだ。特に、自分たちを見てくれる人が笑顔になってくれるととてもうれしいし、やりがいを感じる。

(4) カフェ班

- ・カフェを開くといっても、具体的には何から準備していいか分からなかったもので、まずはメニューを考えることにした。話し合いの結果、地元の名産品を使ってメニューを作ろうということになった。そして、学校にはピザ窯があって最近あまり使われていないということを知ったので、オリジナルのピザを作ることに決まった。色々なものをトッピングして試作した中で、おいしく、作りやすかったのでちりめんとじゃこ天をトッピングするレシピに決まった。みさこうマルシェで販売することになったが、どれだけ売れるか不安だった。しかし、当日はたくさんのお客さんが買って来て完売となった。買ってくれたお客さんがおいしいと言って来て本当にうれしかった。その後、文化祭でも販売してまたたくさんの人に買ってもらえた。ピザ窯が一つしかなく、一度にお客さんが来た時に待たせてしまうこともあったので、来年はもっとスムーズに販売する方法を考えたい。
- ・今年は、ピザのメニューを考えたと良かったと思っていたが、ピザ窯は運搬が大変だという課題も残った。その中で、せんたん劇場をすることが決まり、地域の人との交流の中心がカフェということになった。そこで、外部の人の助けも借りながら、リヤカー屋台を作ることになった。カフェ班なのに屋台を作るということで、最初はかなり戸惑ったが、屋台ができてくるとすごく達成感があった。今回のメニューは商品開発班の人たちが作ってくれたので、屋台作りで忙しかった私たちはすごく助かった。当日は、たくさんの方が来てくれたのでほっとした。地域でのイベントだと、高校生が地域にいるというだけで地域の人たちがすごく喜んでくれるし、私たちもうれしい。でも、私たちは「カフェ班」なので、来年は接客やメニューももっと工夫してカフェのクオリティを上げたい。今年作った屋台で色々なところに出かけて、誰が来ても喜んでもらえるカフェを運営したい。

(5) 商品開発A班

- ・卒業生とのコラボ商品である、あいたおるを開発し試験販売を行うことができた。自分たちが考えて形にした商品を、たくさんの人に買ってもらえてとてもうれしかった。また、地元の特産品について学べたり、実際に自分たちで地元の食材を使った商品を作ったりすることで、地元のことについても深く理解することができた。今まで作ったことのない裂織りを上手に作れるようになったことが自分の成長だと思う。今年は、カフェ班と協力してポタージュスープの販売を行ったけれど、来年もカフェ班や防災班など他の班と協力して商品開発を行いたい。特に、食品については保健所の許可が下りる商品を作るのが難しいため、今年少しだけ取り組んだ保存食の研究に力を入れて取り組んでいきたい。
- ・活動を通して、自分が伊方町の特産品を知ることができたし、他の人にも伝えることができた。私が参加した大きなイベントはせんたん劇場とせんたん発表会だけど、来た人に喜んでもらうことができたと思っている。来年は、カフェ班に似合うようなかわいい小物を作ったり、商品名をアート班と一緒に考えたりするなど、他の班とコラボすることでより良い商品を開発することができるのではないかと考えている。

(6) 商品開発B班

- ・瀬戸アグリトピアと連携した活動をするということだったが、最初は具体的な案が決まらずに苦労した。アグリトピアの人にも話し合いに参加してもらい、アグリトピアで生産しているものを使って商品開発をする案と、アグリトピアの施設を活用して体験活動やツアーの企画を行うという案の2つの案に絞って活動することにした。夏までは、ブルーベリーを使った商品開発を行い、クッキーとパンを作ってみさこうマルシェで販売した。秋からはさつま芋を使った商品開発を行い、いもけんぴやスイートポテト、焼き芋を佐田岬ワンダークリスマスで販売した。商品開発は比較的スムーズに進んだ。アグリトピアの人やお客さんと話す機会が多かったので、自然とコミュニケーション能力が身に付いた気がする。ツアーのことはあまりできなかったもので、来年やってみたい。

- ・伊方町の特産品と言えばみかんだが、あえてみかん以外の特産品を使って商品開発をすることができたのは面白かったのではないかと思う。みかん以外の商品の価値が上がれば、町の新しい産業になると思うので、みっちゃん大福のように定期的に売ることのできる商品にできるように研究したい。ツアーについては、せんたん劇場の中で大久ツアーを行っただけで、あまり研究を進めることができなかった。ツアーは形のあるものではないけれど、伊方町では「商品」としてはまだあまり研究されていないと思うので、来年何か一つはプランを完成させたい。今年一年間の活動を通して、何か新しいことをするときにはしっかり計画を立てないといけないことや、色々な人と協力して物事を進めていくことや、自分の役割を考え行動することの大切さを学ぶことができた。

(7) せんたん部

- ・せんたんミーティングでは、他校の生徒と関わることで新しい発見や考え方を知ることができた。今年行ったどの活動も、自分たちが主催者になり一から考えていくので、発想力や第三者的目線で物事を見る力が身に付いた。みさこうマルシェやせんたん劇場では、地域の人に多く参加していただき、高校生が地域を元気にすることができたと感じている。今まで地域おこしの活動が自分の中では自己満足で終わっていた。しかし、今年度の活動ではせんたん部の部長になったこともあって、周りの反応などにも耳を傾けることができるようになった。せんたん劇場は、三崎高校のすべての研究班で作ることになって、全体の動きの確認やまとめることが大変な場面もあったけれど、当日には混乱なくスムーズに開催することができて達成感があつた。私自身が伊方町の出身ではないため、地域のことについて知らないことがまだまだあるので、もっともっと知っていきたいと思う。
- ・せんたん部が中心となって行ったイベントを通して、町内外のたくさんの人に「三崎高校」という名前を広めることができた。また、せんたんミーティングでは、同世代の人たちと深く接することで、違う視点から自分の高校を見ることができた。マーマレードや裂織りシュシュの開発を通して、三崎高校に新たな特産品を作ることができたので、今後本格的な販売について研究していきたい。地域のたくさんの方々と関わったり、イベントの運営を行ったりする中で、臨機応変に対応する力が身に付いた。急きょ予定が変わるものになったときに自分はどういうことをすればよいのかを、常に考えることができるようになった気がする。今年度は、企画の段階で時間がかかりすぎて、先生方の力を借りることが多かったので、来年度は、早め早めの行動をとり、イベントまでの時間に余裕を持たせるとともに、内容を全て自分たちで考えることができるようにしていきたい。

3 目標と実施状況

本事業の研究開発開始時に八つの目標を設定した。

本構想において実現する成果目標は三つある。一つ目の「生徒による3年間の地域協働活動における成果報告書の提出率100%」という目標においては、その準備段階として、本年度の1、2年生全員が年度末に成果報告書を提出している。自らの探究活動を見直すことで、次年度への改善を図るとともに、自らの考えを論理的に表現する力を伸長させることができると期待している。二つ目の「高校卒業後地元への就職率60%」という目標においては、今年度卒業生の地元への就職内定率は75%となっており、目標を達成している。昨年度卒業生の地元への就職率は47%であり、本事業を通して地元への愛着を高めた生徒が増加したためではないかと考えている。この傾向を来年度以降も継続させ、三つ目の「高等学校卒業後10年以内の地元への就職率30%」という目標を達成できるようにしたい。

地域人材を育成する高校としての活動指標における目標も三つである。「地域と協働した取組を含む研究授業の年間実施回数5回」という目標においては、2021年度の目標達成に向け、本年度は各教科において研究に取り組んだ。具体的には、国語科の授業で4時間、芸術科音楽の授業で6時間、家庭科の授業で10時間、英語科の授業で1時間程度の時間で地域と協働した取組を含む授業を行った。また、家庭科で地域の人を講師として招いたり、成果物を地域の人に見ても

らったりする内容の授業を4時間行い、地域の人にも本校の探究活動に興味を持ってもらうよい機会となった。「地域と協働した取組に関する年間研究発表回数5回」という目標においても、2021年度の達成に向け、本年度は研究を進めた。校内の研究発表会に加え、様々な機会をとらえ10回程度の研究発表を行い、幅広い年代や立場の人に本校の取組を知ってもらうことができた。特に、中学生一日体験入学や学校見学に来た中学生が本校の地域協働活動に強い関心を持つことが多く、本校の魅力の創出につながっていると感じている。「学校フェイスブックの1か月当たりの平均更新回数15回」においては、1年間で128回、月平均11回更新した。ホームページと連動して活用することで、相乗効果により、これまで以上に多くの人に本校の情報を届けることができています。今後も有効活用し、情報発信に努めていきたい。

地域人材を育成する地域としての活動指標における目標は二つである。

「外部人材として参画する民間等の団体数10団体」という目標においては、現在7団体の参画がある。今後も多くの団体と協働することで、2021年度の目標達成に向けて活動を推進したい。「ブーメラン人材へのUターン支援プログラムの実施回数3回」という目標においては、本年度は校内で2回の取組を行った。1年生のインターンシップ実習の実施や、全校生徒による地方祭への参加等の活動を通して、地域理解を深め、郷土愛を高めることができた。今後は、起業家育成講座や地元企業による合同就職説明会など、高校生だけではなく町外進学者なども対象とした支援プログラムを伊方町や地元企業と連携して実施することで、ブーメラン人材としてUターンする卒業生をさらに増やすことのできる取組を進めたい。

目標の多くが中・長期的な達成目標であるため、本年度はその準備期間という意味合いが強かった。来年度は、本年度の取組を基に目標達成に向けた具体的な取組を行っていきたい。

4 次年度以降の課題及び改善点

初年度の活動を通して、探究活動が活発化し深度が深まっていくにつれ、生徒・教員ともに負担が増加する、生徒や担当教員によって知識や経験の差が大きいため、新しいことに取り組む際に企画段階で時間がかかるという課題が生まれた。

負担が増加するという課題の原因としては、主となる活動時間が週に1時間の総合的な学習（探究）の時間しかないため、放課後等の時間を使わざるを得ないことや、各種行事が休日に行われること、突発的に高校への行事参加依頼等が入ることなどが挙げられる。

その改善策としては、各教科の中で地域協働活動に取り組むカリキュラムの作成をより推進していく必要がある。また、地域との連携をさらに進めることで、休日の行事における生徒の活動を地域の人に依頼することにより、教職員の負担を減らすことができるのではないかと考えている。生徒の負担を減らすための改善策としては、地域活動の増加単位制度について研究している。地域行事等への参加に応じて、総合的な学習（探究）もしくは学校設定科目において単位増を認めることで、生徒の、より主体的な行事参加を促すとともに、負担感の軽減につながるのではないかと考えている。これらの改善策を実行するためには、地域関係者との協議や校内の調整等が必要になるため、関係者で話し合いを進めて導入に向けて検討していきたい。来年度は、生徒が参加する可能性のある地域活動や地域行事をリストアップし、それぞれの活動について、その責任者や活動時間等を明確にしていきたい。そうすることで、活動への計画的な参加や、学校全体としての予定を立てやすくなると考えている。その作業が完了し次第、外部の人による生徒監督や増加単位制度の試験的な運用を行う。その結果を基に、最終年度の本格的な実施を目指したい。

知識・経験の不足については、学校をより開かれた場所にして様々な立場の人に探究活動に関わってもらい、それらの人の知識や経験を学習活動の場で活用していくことが必要だと考えている。地域人材や外部の専門家の積極的な活用を推進することで、学校教育だけでは不足している知識や経験を補い、スムーズな探究活動を推進していきたい。また、教科間の連携や教科を横断する取組を増やすことで、それぞれの教職員の持つ知識や経験を共有していきたい。学校全体でチームとして事業に取り組むことで、活動の質を上げるとともに、関係者の負担を減らすことが

できるようにしていきたい。

本年度は、各研究班における地域人材や外部の専門家の発掘、依頼は地域協働課が行ってきた。来年度は、各班の生徒や担当教員の要望を聞く機会を設けて、より柔軟な実施を行いたい。また、本年度は、研究班を横断した情報共有の機会は不定期に行ったが、来年度は月に一度は機会を設け、定期的に行うようにしたい。